

No.4 表現行列

この回のゴール

- 基底を決めたときの線形写像の表現行列を定義し、求められる。
- 「 $\mathbf{x}$ の座標に表現行列を掛けると $f(\mathbf{x})$ の座標になる」ことを説明できる。
- 合成写像の表現行列が表現行列の積になることを使える。
- 同じ線形写像でも、基底の取り方で表現行列が変わることを例で説明できる。

以下, V, W を有限次元のベクトル空間, $f: V \rightarrow W$ を線形写像とする。

■ 1. 表現行列の定義

No.1 定理 2 では, $\mathbb{R}^n \rightarrow \mathbb{R}^m$ の線形写像を「 $f(\mathbf{e}_j)$ を第 j 列に並べた行列」で表した。一般の V, W でも、基底を 1 つずつ決めれば同じことができる。

定義 1 表現行列

V の基底 $(\mathbf{v}_1, \dots, \mathbf{v}_n)$ と W の基底 $(\mathbf{w}_1, \dots, \mathbf{w}_m)$ を決める。各 $f(\mathbf{v}_j)$ を W の基底で表して

$$f(\mathbf{v}_j) = a_{1j}\mathbf{w}_1 + a_{2j}\mathbf{w}_2 + \cdots + a_{mj}\mathbf{w}_m \quad (j = 1, \dots, n)$$

とすると、 $m \times n$ 行列 $A = (a_{ij})$ を、これらの基底に関する f の**表現行列**という。

作り方

$f(\mathbf{v}_j)$ の (W の基底に関する) 座標を、第 j 列に並べる。

これを形式的に

$$(f(\mathbf{v}_1) \cdots f(\mathbf{v}_n)) = (\mathbf{w}_1 \cdots \mathbf{w}_m) A$$

と書くことがある (右辺は「行列の積」と同じ規則で、ベクトルの 1 次結合を並べたもの)。

例 1

$V = \mathbb{R}^n, W = \mathbb{R}^m$ で、どちらも標準基底をとると、表現行列は No.1 定理 2 の $A = (f(\mathbf{e}_1) \cdots f(\mathbf{e}_n))$ と一致する。

例題 1

微分 $D: \mathbb{R}[x]_3 \rightarrow \mathbb{R}[x]_2$ の、基底 $(1, x, x^2, x^3)$ と $(1, x, x^2)$ に関する表現行列を求めよ。

【解答】

$$D(1) = 0, \quad D(x) = 1, \quad D(x^2) = 2x, \quad D(x^3) = 3x^2.$$

それぞれの $(1, x, x^2)$ に関する座標 ${}^t(0, 0, 0)$, ${}^t(1, 0, 0)$, ${}^t(0, 2, 0)$, ${}^t(0, 0, 3)$ を列に並べて

$$A = \begin{pmatrix} 0 & 1 & 0 & 0 \\ 0 & 0 & 2 & 0 \\ 0 & 0 & 0 & 3 \end{pmatrix}.$$

■ 2. 座標と表現行列

定理 1

f の表現行列を A とする. $\mathbf{x} \in V$ の座標を ${}^t(x_1, \dots, x_n)$, $f(\mathbf{x})$ の座標を ${}^t(y_1, \dots, y_m)$ とすると

$$\begin{pmatrix} y_1 \\ \vdots \\ y_m \end{pmatrix} = A \begin{pmatrix} x_1 \\ \vdots \\ x_n \end{pmatrix}.$$

【証明】 $f(\mathbf{x}) = f(\sum_j x_j \mathbf{v}_j) = \sum_j x_j f(\mathbf{v}_j) = \sum_j x_j \sum_i a_{ij} \mathbf{w}_i = \sum_i (\sum_j a_{ij} x_j) \mathbf{w}_i$. 座標は一意なので $y_i = \sum_j a_{ij} x_j$, つまり $\mathbf{y} = A\mathbf{x}$. $\square$

座標写像 (No.3 定理 6) を $\varphi_V: V \rightarrow \mathbb{R}^n$, $\varphi_W: W \rightarrow \mathbb{R}^m$ とすると, 定理 1 は次の図で表される.

$$\begin{array}{ccc} V & \xrightarrow{f} & W \\ \varphi_V \downarrow & & \downarrow \varphi_W \\ \mathbb{R}^n & \xrightarrow{A \text{ を掛ける}} & \mathbb{R}^m \end{array} \quad \text{上を回っても下を回っても同じ } (\varphi_W \circ f = f_A \circ \varphi_V)$$

「抽象的な空間の線形写像」は, 基底を決めると「座標に行列を掛ける」という計算に置き換えられる.

例題 2

例題 1 の表現行列を使って, $f = 4 - x + 5x^2 + 2x^3$ の微分を求めよ.

【解答】 f の座標は ${}^t(4, -1, 5, 2)$ なので,

$$\begin{pmatrix} 0 & 1 & 0 & 0 \\ 0 & 0 & 2 & 0 \\ 0 & 0 & 0 & 3 \end{pmatrix} \begin{pmatrix} 4 \\ -1 \\ 5 \\ 2 \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} -1 \\ 10 \\ 6 \end{pmatrix}.$$

よって $f' = -1 + 10x + 6x^2$. (直接微分した結果と一致する.)

■ 3. 基底を変えると表現行列が変わる

同じ線形写像でも, 基底の選び方で表現行列は変わる. うまく基底を選ぶと, 表現行列がとても簡単になることがある.

例題 3

$A = \begin{pmatrix} 1 & 2 \\ 2 & 1 \end{pmatrix}$ が定める線形変換 $f_A: \mathbb{R}^2 \rightarrow \mathbb{R}^2$ について, 基底 $\mathbf{v}_1 = {}^t(1, 1)$, $\mathbf{v}_2 = {}^t(1, -1)$ (定義域・値域とも同じ基底を使う) に関する表現行列を求めよ.

【解答】

$$f_A(\mathbf{v}_1) = \begin{pmatrix} 3 \\ 3 \end{pmatrix} = 3\mathbf{v}_1 + 0\mathbf{v}_2, \quad f_A(\mathbf{v}_2) = \begin{pmatrix} -1 \\ 1 \end{pmatrix} = 0\mathbf{v}_1 + (-1)\mathbf{v}_2.$$

座標 ${}^t(3, 0)$, ${}^t(0, -1)$ を列に並べて, 表現行列は $\begin{pmatrix} 3 & 0 \\ 0 & -1 \end{pmatrix}$.

コラム：対角化の予告

標準基底では $\begin{pmatrix} 1 & 2 \\ 2 & 1 \end{pmatrix}$ だった変換が、基底 (v_1, v_2) では**対角行列**になった。 v_1 方向には 3 倍、 v_2 方向には -1 倍するだけ、という変換の正体が見えたことになる。 このように「表現行列が対角行列になる基底」を探すのが第 6 章の**対角化**であり、 $f(v) = \lambda v$ を満たす v を**固有ベクトル**という。

■ 4. 合成と逆写像

定理 2 合成の表現行列

$f: V \rightarrow W, g: W \rightarrow U$ を線形写像とし、 V, W, U の基底を 1 つずつ決める。 f の表現行列を A , g の表現行列を B とすると、 $g \circ f$ の表現行列は BA である。

【証明】 x の座標を x' とすると、定理 1 より $f(x)$ の座標は Ax' , $g(f(x))$ の座標は $B(Ax') = (BA)x'$. これがすべての x で成り立つので、 $g \circ f$ の表現行列は BA (V の基底ベクトル v_j の座標 e_j を代入すると第 j 列が一致する)。□

注意

順番に注意。「 f してから g 」は $g \circ f$ と書き、表現行列は BA (あとに行う方が**左**)。

定理 3 同型写像の表現行列

$\dim V = \dim W = n$ とし、 f の表現行列を A とする。 f が同型写像 $\iff A$ が正則。このとき f^{-1} の表現行列は A^{-1} 。

【証明】定理 1 より、 f が単射 $\iff$ 「 $Ax' = 0$ なら $x' = 0$ 」 $\iff A$ が正則 (第 2 章 No.3 定理 5)。次元が等しいので単射と同型は同値 (No.3 定理 2 (4))。 $f^{-1} \circ f = \text{id}_V$ の表現行列は E なので、定理 2 より (f^{-1} の表現行列) $\cdot A = E$ 。□

コラム：回転と加法定理

$\mathbb{R}^2$ の回転 R_θ の表現行列 (標準基底) は $\begin{pmatrix} \cos \theta & -\sin \theta \\ \sin \theta & \cos \theta \end{pmatrix}$ だった。 β 回転してから α 回転すると $\alpha + \beta$ 回転になる ($R_\alpha \circ R_\beta = R_{\alpha+\beta}$) ので、定理 2 より

$$\begin{pmatrix} \cos \alpha & -\sin \alpha \\ \sin \alpha & \cos \alpha \end{pmatrix} \begin{pmatrix} \cos \beta & -\sin \beta \\ \sin \beta & \cos \beta \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} \cos(\alpha + \beta) & -\sin(\alpha + \beta) \\ \sin(\alpha + \beta) & \cos(\alpha + \beta) \end{pmatrix}.$$

左辺を計算して成分を比べると、三角関数の**加法定理**がそのまま出てくる (練習問題 6)。

■ 練習問題

- 微分 $D: \mathbb{R}[x]_2 \rightarrow \mathbb{R}[x]_2$ について、次に答えよ.
 - 基底 $(1, x, x^2)$ に関する表現行列 A を求めよ.
 - $A^3 = O$ を確かめ、その意味を説明せよ.
 - 基底 $(1, x, \frac{1}{2}x^2)$ に関する表現行列を求めよ.
- 転置 $T: M_{2,2}(\mathbb{R}) \rightarrow M_{2,2}(\mathbb{R})$, $T(X) = {}^tX$ の、基底 $(E_{11}, E_{12}, E_{21}, E_{22})$ に関する表現行列を求めよ.
- $A = \begin{pmatrix} 2 & 1 \\ 1 & 2 \end{pmatrix}$ が定める $f_A: \mathbb{R}^2 \rightarrow \mathbb{R}^2$ の、基底 $({}^t(1, 1), {}^t(1, -1))$ に関する表現行列を求めよ.
- $f: \mathbb{R}[x]_2 \rightarrow \mathbb{R}[x]_2$, $f(p) = p(x+1) - p(x)$ (No.3 例題 1) の、基底 $(1, x, x^2)$ に関する表現行列を求め、そのランクが $\dim \operatorname{Im} f$ と一致することを確認せよ.
- $T: \mathbb{R}[x]_2 \rightarrow \mathbb{R}^3$, $T(f) = {}^t(f(0), f(1), f(2))$ の、基底 $(1, x, x^2)$ と標準基底に関する表現行列を求めよ. また、それが正則であることから T が同型写像であることを確かめよ.
- (考えてみよう) コラムの行列の積を計算して、 $\cos(\alpha + \beta)$ と $\sin(\alpha + \beta)$ の加法定理を導け.

■ 練習問題の解答

- $D(1) = 0$, $D(x) = 1$, $D(x^2) = 2x$ より $A = \begin{pmatrix} 0 & 1 & 0 \\ 0 & 0 & 2 \\ 0 & 0 & 0 \end{pmatrix}$.
 - $A^2 = \begin{pmatrix} 0 & 0 & 2 \\ 0 & 0 & 0 \\ 0 & 0 & 0 \end{pmatrix}$, $A^3 = O$. 定理 2 より A^3 は $D \circ D \circ D$ の表現行列なので、「2 次以下の多項式を 3 回微分すると 0 になる」ことを表している.
 - $D(1) = 0$, $D(x) = 1$, $D(\frac{1}{2}x^2) = x$ なので、表現行列は $\begin{pmatrix} 0 & 1 & 0 \\ 0 & 0 & 1 \\ 0 & 0 & 0 \end{pmatrix}$. 基底を変えると、(1) の成分の 2 が 1 になった.
- $T(E_{11}) = E_{11}$, $T(E_{12}) = E_{21}$, $T(E_{21}) = E_{12}$, $T(E_{22}) = E_{22}$ より

$$\begin{pmatrix} 1 & 0 & 0 & 0 \\ 0 & 0 & 1 & 0 \\ 0 & 1 & 0 & 0 \\ 0 & 0 & 0 & 1 \end{pmatrix}.$$
- $f_A({}^t(1, 1)) = {}^t(3, 3) = 3\mathbf{v}_1$, $f_A({}^t(1, -1)) = {}^t(1, -1) = \mathbf{v}_2$ より $\begin{pmatrix} 3 & 0 \\ 0 & 1 \end{pmatrix}$.
- $f(1) = 0$, $f(x) = 1$, $f(x^2) = (x+1)^2 - x^2 = 1 + 2x$ より $\begin{pmatrix} 0 & 1 & 1 \\ 0 & 0 & 2 \\ 0 & 0 & 0 \end{pmatrix}$. ランクは 2 で、No.3 例題

1 の $\dim \operatorname{Im} f = 2$ と一致する.

5. $T(1) = {}^t(1, 1, 1)$, $T(x) = {}^t(0, 1, 2)$, $T(x^2) = {}^t(0, 1, 4)$ より $\begin{pmatrix} 1 & 0 & 0 \\ 1 & 1 & 1 \\ 1 & 2 & 4 \end{pmatrix}$. 行列式は $2 \neq 0$ で正則な

ので, 定理 3 より T は同型写像 (No.2 例題 3 の結果と一致).

6. 左辺 = $\begin{pmatrix} \cos \alpha \cos \beta - \sin \alpha \sin \beta & -\cos \alpha \sin \beta - \sin \alpha \cos \beta \\ \sin \alpha \cos \beta + \cos \alpha \sin \beta & -\sin \alpha \sin \beta + \cos \alpha \cos \beta \end{pmatrix}$. $(1, 1)$ 成分と $(2, 1)$ 成分を比べて

$$\cos(\alpha + \beta) = \cos \alpha \cos \beta - \sin \alpha \sin \beta, \quad \sin(\alpha + \beta) = \sin \alpha \cos \beta + \cos \alpha \sin \beta.$$